

桜が続いて春の花々が咲き揃い、木々の新芽も綺麗な今日この頃です。でも、そんな美しい自然とは裏腹に、コロナウィルスに明け暮れる毎日です。皆さまいかがお過ごしでいらっしゃいますか。どうぞお元気でいられますよう願っています。いつもサーバスの活動にご協力いただきありがとうございます。

3月の始め頃は、コロナウィルスの問題はもっと早く収束すると思っていた。そして、今年は日本サーバス国内会議、東アジア会議、SI会議等、サーバス関係の会議が予定されていなくて良かったと思っていました。しかし、日を重ねるにつれて、コロナウィルスの状況は深刻になっています。増えていく感染者、人がまだまだ外に出ている各地の様子をテレビで見ながら、最悪のシナリオが日本に起こらないように祈るばかりです。そして、来年3月の国内会議は無理なく出来るかという心配も頭をかすめます。そんな中にも、「今マスク作りに忙しいです。近所の小学生用に20枚作りました。娘も送ってくれとっています。」という励まされる便りも会員さんから届いています。お互いに自分がコロナウィルスにかからないように、又、少しでも良い環境を守るように、最大限の努力をして日々過ごしたいものです。



サーバスメンバー手作りのマスク



A.Tさん、近畿支部総会で乾杯の音頭

もう一つ日本サーバスにとって、とても悲しいお知らせがあります。それは、日本にサーバスを立ち上げ、日本サーバスの創設時から力を尽くして下さったA.Tさんがお亡くなりになった事です。その働きに心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

今回の会報は、次の内容でお届けします。

1. A.Tさんの死を惜しむ

はじめに 会長 H.T

A.Tさんへの追悼と感謝 横浜市 T.K

A.T氏のサーバス活動の足跡 大阪府豊能郡 T.M

A.Tさんを偲んで 愛知県尾張旭市 M.A

2. SERVAS YOUTH 部

サーバスユース部活動に思う ユース部会長 N.Y

ホームステイを通して生まれた心の繋がる交流 福島市 C.N

3. SERVAS Traveler からの嬉しい便り

Japan from north to south in 3 months

. Netherlands M. C

4. 編集後記にかえて 会長 H.T

1. A.T さんの死を惜しむ。

はじめに

4月1日、A.T 様の奥様よりお電話があり、A.T 様が昨夜お亡くなりになった事と、ご葬儀の日程と場所を知らせて下さいました。とてもショックでした。とりあえず、その事を役員の皆様にお知らせし、日本サーバスの名前で弔電と供花をする事にいたしました。私はコロナウィルスを鑑み、葬儀には参列せず、自宅にて手を合わせましたが、葬儀に参列して下さった会員の方からは、「日本サーバスの供花があって、とても嬉しかった。」との便りをいただきました。その後も「葬儀には参列しませんでした、弔電を出しました。」「毎日朝と夕に御線香をたいて拝んでいます。」等々のお知らせをいただきました。改めて、A.T さんの偉大な活動と人徳を、又、同時にサーバスの縁の深さと素晴らしさを感じています。

私事で恐縮ですが、私がサーバスに入会した頃、A.T さんは日本サーバスの会長で素晴らしい働きをされていて、雲の上のような存在でした。ずいぶん年が経ち 2010 年私が近畿支部長になった時、A.T さんは名誉会長でいらっしゃいました。同じ近畿支部で例会にはよくご参加下さり、色々良いご意見を頂きました。そんな中で特に印象に残っているのは、A.T さんの事務所での天神祭と、日本サーバス 50 周年記念誌の編集です。A.T さんの事務所は北浜にあり、天神祭見物にはもってこいの場所です。それで 2011 年 7 月に「天神祭を楽しむ」という支部例会を行いました。事務所の収容定員をはるかに超える参加者でしたが、全員譲り合っての祭り見物、かがり火船の炎や提灯に照らされた百艘の大船団が大川を行き交う様や、祭りの最後に打ち上げられる花火等歓声を上げながら皆で楽しみま



天神祭

した。次に、サーバス 50 周年記念誌の編集、記念誌の編集長である A.T さんから近畿支部役員にお声がかかり、T.S さん（現在関東支部）と私で手伝いました。A.T さんの事務所には A.T さんと秘書の方の手によって整理されたサーバス関係の資料が山と積まれていました。資料の多くはガリ版印刷でした。記念誌に役立ちそうなものを選び出して、T.S さんと手分けして持ちかえり、

うんざりする程の量をパソコンに打ち込み、A.T さんに送りました。次に事務所に行くと、それらが編集されていて点検です。有能な秘書の方も交えた得難い経験でした。

A.T さんは 2017 年末で仕事を終わられ、北浜の事務所をお閉めになりました。

サーバスのメンバーで A.T さんに 1 番最後に会われたのは前会長の O.T さんだと思います。O.T さんは訃報を聞かれて、「2 年前ご自宅にお伺いし、親しくいろいろなお話が出来たのが良い思い出です。旅行本でサーバスの名前を見つけ問い合わせをした見ず知らずの私に、便せん 2 枚のご丁寧なお手紙を下された事がきっかけでサーバスとの繋がりが出来た事を話し、持参していたその時のお手紙をお見せしたら、とても懐かしがっていらっしゃいました。」とお知らせくださいました。

何もかも懐かしい思い出です。A.T さん、本当に有難うございました。

どうぞ安らかに眠りください。

会長 H.T



2015 近畿支部例会

合掌

A.T さんへの追悼と感謝

横浜市 T.K

A.T さんの訃報を受けて、あの温顔と明晰なトークに二度と接する事が出来ないと思うと、痛切な寂しさを感じます。A.T さんが体調不良とは聞いていましたので、1980 年に A.M さんが突然亡くなった時ほどのショックは受けませんでした、今日に至る前にお目にかかっておけばよかったと後悔するばかりです。

A.T さんは宮崎県に生まれ、大学卒業後、藤沢薬品工業株式会社に入り、同社の法規部門担当役員まで勤められ、1990 年代の 10 年ほどは米国藤沢薬品の社長としてシカゴに駐在されました。同社を退職後は、大阪で知財問題専門の個人事務所を構えておられました。

何度も語り継がれた話ですが、1962 年に英国の学生 R.S さんが、世界一周の途路来日する前に、毎日新聞(?)に投稿してホームステイ先を求めたのに応えて、20 名以上が手を挙げて歓迎しました。その間に R.S さんから国際サーバスの組織と活動を紹介され、東京では A.M さんが、大阪では A.T さんが中心となって、その年のうちに日本サーバスにつながる組織が立ち上がりました。

ホームステイとかボランティアなどの概念も用語も定まらない中で、日本経済の高度成長と国際化の波に乗り、1964 年の東京オリンピックや日本人の海外旅行解禁、1970 年の大阪万博以降の来日外国人の増加などにも助けられて、日本サーバスは 1980 年代には 400 人以上の会員を擁するまでに成長しました。会の内部では、大企業の企業戦士であると同時に強靱な個性の持ち主である A.M さんと



2010 国内会議後の親睦会

A.T さんの指導によるところが大きかったと思います。

どちらかといえばパターンリズムの強い A.M さんは、お二人の肩書きを当初は「東日本代表世話人」「西日本代表世話人」と定めたり、「日本人は外国人の接遇に不慣



2012 日本サーバス 50 周年記念国内会議

れなので、トラベラーには世話人による十分なオリエンテーションが必要」として、来日時の数日は A.M さん宅にステイさせていました。これに対して A.T さんは、「ホストリストの情報に基づいて、ホストもトラベラーも(今で言う)自己責任で行動すればよい」との考えでした。

A.M さんが 1980 年に急逝された後は A.T さんが会長となり、毎年のホストリスト印刷と各国サーバスへの配布体制を確立し、全国代表者会議(いわゆる国内会議)を毎年開催して、サーバスの理念や方法について役員間の理解と認識を擦り合わせるような、現在まで続く日本サーバスの伝統が確立されたのでした。A.T さんは、米国駐在中も本部会報に定期的に寄稿することによって、その後も国内会議にほとんど皆勤することによって、指導と助言を継続され、さらには 1987 年の「日本サーバス 25 年史」と 2012 年の「50 年史」の編集刊行は、全く A.T さんの奮闘のおかげで実現したのです。

実に長いことお世話になった A.T さんに、衷心からの感謝を捧げます。

A.T 氏のサーバス活動の足跡

大阪府豊能郡 T.M

1962 年 1 月 20 日、英国人の大学生 R.S さんが横浜港に着いたとき、東京の A.M さんが出迎え、このことを新聞記事で知った A.T さんは直ぐに A.M さんに連絡をとったということを A.T さんはよく

言っていました。A.T さんは日本サーバスの誕生に立ち会った会員の一人だったのです。日本サーバスの創設時からの会員であった A.T さんの功績をここで改めて振り返りたいと思います。

1964 年 日本サーバス友の会(日本サーバスの旧称)は全国を東日本と西日本に分割し、初代西日本支部代表に A.T さんが就任しました。

以下、その足跡の概略を書き留めておきます。

1967 年 日本サーバス友の会世話役一覧表

全日本世話役代表	A.M
東日本支部代表	A.Y
西日本支部代表	A.T
広島地方支部代表	H.T

1971 年 東日本支部と西日本支部の 2 部制が廃止され、現在の 7 支部制が導入される。
本部会長は A.M さん、副会長は A.T さんが就任し、近畿支部長を兼任する。

それ以後、1979 年までこの体制が維持されます。

1981 年 前年の A.M さんの急逝により、A.T さんは日本サーバス友の会の会長に就任。

1982 年 「サーバス友の会」は「日本サーバス」に改称され、A.T さんは初代日本サーバス会長に就任し、1990 年まで会長を務める。

2012 年 日本サーバス 50 周年誌が A.T さんを中心として編集、発行される。

A.T さんは日本サーバス会長を退任されたあと、名誉会長として、日本サーバスの本部・支部役員の助言・相談役として日本サーバスの発展に寄与されました。



2009 支部総会で太鼓に挑戦する A.T さん



2013 近畿支部例会

A.T さんを偲んで

愛知県尾張旭市 M.A

A.T さんは大学を卒業後、藤沢薬品の時代に、フルブライト留学生試験に合格したものの、上司の説得により留学を断念。それゆえか、藤沢薬品では出世街道まっしぐら。国際的にもビッグ A.T として名をはし、引退後は弁理士資格を生かして起業され、その事務所で花火を見る会をしたことなどみなさんご存知のとおり。



1998 国内会議仙台

A.T さんと最初の会話は、確か 1988 年 2 月、広島での国内会議だったと思います。その時私は東海北陸支部の支部長をしており、当時 4 歳の娘を連れて国内会議に参加しました。娘が自分の席で持参の塗り絵かなにかをして、会議の間中おとなしくしていたものですから、会長の A.T さんにほめていただいたのが会話のきっかけでした。それ以降、連続ではありませんが、7 支部すべての国内会議に娘を連れまわし、A.T さんとの親交が深まりました。

当時 A.T さんは、会議の席でメガネをかけかえられるのが不思議で、私はぶしつけにもその理由をお聞きしたことがありましたが、A.T さんは「そのうちあなたにもその理由が分かる時がくるよ」と笑っておられました。私もいつしかメガネをつけたり外したりするようになった頃、A.T さんがうれしそうに「孫が宝塚歌劇団に入団したよ」と話されたのが、昨日のことのよう思い出されます。

その私の娘は、学生時代、近畿支部でサーバスに入会し、2006 年にドイツ一人旅を実行したものの、(この時のレポートは 50 周年記念誌に掲載済み) 一人旅は性に合わないのか、その後サーバスも退会し、A.T さんを残念がらせてしまいました。

A.T さんが亡くなり、第二世代の育成に失敗した今、私は孫の小学 2 年生を、サーバス第三世代として育成していこうとの決意を新たにしました。

サーバスは息長く続けていきます。 A.T さん、安らかに。

2. SERVAS YOUTH 部

サーバスユース部活動に思う

ユース部会長 N.Y

サーバスユース部の活動に携わってちょうど一年が経ちました。ヨーロッパ等では、10 代を中心に活発な活動が行われているサーバスユースの活動ですが、日本サーバスユースにおいては、まだまだ模索しながら活動を行っております。

そんな中、サーバスユースの活動をもっと日本全国に広めていきましょう！と名乗りを上げて下さったのが、東北支部の C.N さんです。C.N さんは、現在、東北支部の会報の編集を担当されておられます。また、青年海外協力隊としてマレーシアに滞在し、日本とマレーシアの人々とをむすぶ架け橋として活動されていた経験をお持ちです。現在も、その時の経験を活かし、継続して福島とマレーシアの人々との架け橋になる活動を実施されています。今回は、そんな活動の様子をご紹介します。

ホームステイを通して生まれた心の繋がる交流

福島市 C.N

私は 2019 年から福島県とマレーシアを繋ぐ活動をしています。H さんという青年海外協力隊としてマレーシアでボランティア活動をしている時に会ったマレーシア人と「ともだち・カワン・コミュニティ」を立ち上げました。「カワン」はマレー語で「ともだち」の意味です。心の通い合う交流をして「ともだち」になりお互いをポジティブに理解しようとしたり、励まし合える存在になったりすることを目指しています。

その活動のために H が 2019 年 7 月に福島県に来て、私の自宅にホーム



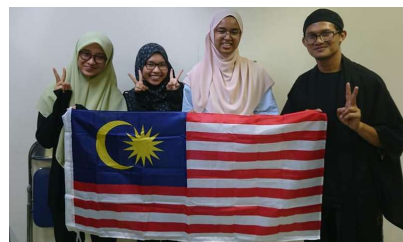
ステイしていました。その際に同じサーバス仲間の N さん宅にもホームステイさせていただきました。N さんは H と庭仕事をしたり、近所を散歩したり、学童に行ったりして過ごされました。日常生活が体験できたことを H は気に入っていました。

H 滞在中、ホームステイ初体験の友人の家でも H が寝泊まりすることがありました。肌で触れる異文化交流を私の友人は大変気に入っておりました。旦那さんも娘さん二人も、当初はホームステイ受け入れ



を心配していたようですがとても楽しんでくれたようです。直接触れ合うことで新しいことを発見するのはサーバスの醍醐味です。サーバスの会員になっていない友人にもホームステイの楽しさを感じてもらえたようで、この時のHとの交流がとても意義深いものになりました。

単なる観光ではない福島県民との交流を満喫したHは福島県のファンになりました。そして、福島県民との心の交流を中心として、福島のよさを世界に発信する映画作りをしようとしています。サーバスの皆さんが実感している「出会った瞬間ともだちになれる、それが世界平和につながっている」という感覚をこの映画で表現したいと思っています。そしてこの映画を多くの方に見ていただき、偏見のない、違いを個性として楽しむことができるような世界が広がっていけばと思っています。



3. SERVAS Traveler からの嬉しい便り

Japan from north to south in 3 months

Netherlands M.C

For years, it was my plan to go to Japan after retirement, so I could stay there for a longer time. A country with a culture totally different from mine. I left my home in The Netherlands at August 5th 2019. I took a train to Moskou, and from there I took the Trans Siberian Railway to the other side of the continent. I wanted to experience how large our world is. And slowly, slowly approaching Japan. I also want to diminish my ecological footprint by avoiding airplane. I spent 30 days to travel through Russia to Sakhalin. I planned to take a ferry from Korsakov, the most southern village on Sakhalin, to Wakkanai, in the north of Hokkaido. But this year the ferry does not go, because a quarrel between the 2 countries. So I had to take a flight from Juzhno to Sapporo. I landed in Japan on September 2nd. My plan was to travel all the way from the north-east to the south-west and back to Tokyo, my final destination.

In Sapporo Ak-san and Ae-san are my hosts. Their apartment shows a collection of things they brought from their travels over the world. They welcomed me with my first traditional Japanese dinner, served in a lot of different bowls. I see a lot of cupboards with beautiful tableware. Later Ae and I are sitting at a low table in the tatami-room. She calligraphies an old poem for me. It is about sakura and weeping willows in Kyoto. Yo-san, a friend of Ae's, is a koto teacher. She invites me to attend a lesson. When we enter, Ae-san kneels for Yo and the students. I follow her example. They play 2 beautiful classical pieces. 'Subarashi',



I said, glad to have taken some lessons Japanese. At the end there was green tea and sweets and a lot of nice chat.

Ak-san is a kyudo teacher. Do I like to come and see? Of course! A lot of young people, mainly women, are practicing. All in beautiful black and white costumes. Ae-san is also practicing. She makes slow and stylish movements with a lot of concentration for every detail. Again and again, to

reach a high grade of perfection. Impressive!

It strikes me that people talk softly, move cautious, everything goes muted and people are silent in the streets and public transport. I become aware of my European way of behaving, I try to lower my voice and to keep my hands still while talking.

My next hosts in Sapporo, Ka-san and Ya-san take me to a ramen restaurant. I haven't yet mastered to eat ramen without dirtying my dress, but the restaurant provides me with a paper apron. My mother did a big job to teach me not to slurp, which is not polite with us. But now... great slurp party!

Good gracious, when we came home I noticed I left my mobile phone in the restaurant. Ya-san returns quickly to the restaurant, but it was closed already. That night I didn't sleep well, but my phone had been handed in by the counter. *Subarashi!*

The annual Hokkaido Servas-Meeting is on September 7th, just while I am here. Ya and Ka take me there. At a posh western dinner near Toyako, I meet other Servas members. Everybody tells about his or her experiences. Assisted by Ka, I try to say a few words in Japanese. And at the end a group photo.



Mi-san, my next hosts lives in a chalet high on a mountain with a fabulous view on Toyako. It is nice to stay with another single woman. She grows her own vegetables. Mi had bought a bread, it surprises her that in Europe people eat rice as well. We are going to make a cycle tour around Toyako (43km). The saddle goes at its highest, but still my knees are close to my ears. It is 27C and rather humid, so I choose my most airy dress, but Mi is dressed in long sleeves, long pants, socks, gloves, hat and shawl. Absolute no sun on her! Toyako has a mountain in the middle, it is very, very beautiful. Then it is time to relax. Mi introduces me in the onsen: a lot of washing and scrubbing on a small stool before a knee high mirror before we lower ourselves in the hot water with a big sigh. Delightful!

I contacted my 3 hosts in Hokkaido before I left home. It was so easy and they were so hospitable, that I decided to contact other hosts later, when I already was in Japan. This was a bit of a risk, but created the possibility to plan the rest of my trip more flexible, which was great!

I am in Sendai at Sa-san and Ma-san's place, the region where the big earthquake took place in 2011. Sa hid for hours under a table waiting for directions from authorities and unsure about Ma who had to walk home. Ma shows me where the water had been. I see signs in the street that warn for tsunami and point out where you have to flee. Sa has done a great job in helping victims, tells Ma. Therefore he cooks breakfast for her since. Tomorrow morning pancakes!



Ma-san takes me to his company and introduces me to his employees. As I learned in my course Japanese I say *hajime mashite* and give his people a friendly smile. They have to laugh, because I forget to bow and my direct looking at them is also not very Japanese. Ma-san has an enterprise in tires. One of his employees handles a machine that presses 3 tires in one. In this way 4 times as much tires fit in a container. Shipped for Bangladesh. I wonder how they take them apart again?

Sa-san is calligraphy teacher. She invites me in her class. She will teach me the kanji for *yama*. First, I have to rub ink with stretched fingers of my right hand, while my left hand is not on the table, but in my lap 'holding an egg'. At least 5 minutes to concentrate on the calligraphy to come. I do my best. The other students enter. I observe the nice way they bow and greet each other. Someone brings jars of jam or the like and suddenly they are exchanging recipes and a lot of laughing. I practice *yama* about 10 times. Applause for every mountain. Thank you, but I don't believe it at all. I am hosted by a young family. I meet Hi-san at Friday evening after his work at Matsumoto station. First, we pick up his daughter at ballet class and then home. At home Hi first takes a bath, comfortable pajama's and playing with his daughter, while his wife As-san cooks a meal with the baby on her back. Hi and As moved from Tokyo to Matsumoto. Much better for a young family, they say. Nature, space and quietness. In Matsumoto Hi doesn't have to work till late. Do I know the term *karoshi*? Yes, we talked about it in Japanese class. And how about As-san? Will she work again, when the children are at school? She is skeptical about her chances to obtain a job on her level. The 'baby-penalty', a big topic in The Netherlands, exists also in Japan.



In Kanazawa I stay with To-san and Hi-san. Just like the Servas hosts I met till now, they travelled a lot. The house is full of photo's Hi made from castles from all over the world. I discover castle De Haar, it is close to my house in The Netherlands. To and Hi don't travel any more, but love to have guests. To-san, a former teacher English, now reads English books with a group of friends and translates them in Japanese to keep up her skills. This evening she has to translate a few pages of Stoner. Hi-san started a kitchen garden after retirement. He is engaged in a fight with bears who like his sweet potatoes and destroyed his crop last year. He has built a stronger fence. Let's hope it lasts.



Mi-san, with whom I stayed at Toyako, told me about the *Shimanami*, a cycle tour in the Setonaikai. Great idea! We agreed to meet each other again. The weather is perfect for cycling: clear blue sky, 24C and a soft tailwind. We cycle from Onomichi over the islands that are connected with bridges to Imabari. Tangerine and lemon trees everywhere. Soft waving palms along the shore. Every now and then a bird, a fisherman: a true paradise!



Hiroshima. At a temple 2 stylists and a hair dresses are busy to arrange a wedding couple and their family as nice as possible for the photo. Every mien and glance is orchestrated. The feet of the man separated, hands in fists, chins up. Women feet closed, left hand

open. All pleats sleekened. And then, a big white cap on the head of the bride. ‘That is to hide the female rage and envy’, tells To-san, my host in Hiroshima and she laughs loudly. Her own marriage with Ku-san was arranged a long time ago and is still going strong. Time to celebrate: paella with oysters, the delicacy of the Setonaikai. Oishii desu!



Ke-san is my *day host* in Beppu. Ke has arranged shelter for me in an old ryokan next to her house. The ryokan is a labyrinth of corridors, stairs, gangways, rooms, kitchens, even a small bridge. No showers, because ryokans in Beppu have an onsen. Mi-san (92), the owner, comes with a pile of yukata and gives me the biggest one. No, she says, the left lap must go over the right one. I descend to the onsen, that looks very authentic. Time stands still, but the hot water flows! From time to time Mi-san comes to see if I am okay. We talk and laugh a lot, she in Japanese and me in Dutch. Doesn't matter, we

have a lot of fun.

Ke-san shows me the theater of Beppu. In the back of the theater are piles of cushions (100 yen) and a kind of folding chairs without legs (200 yen). I rent a chair, walk into the theater and put it down somewhere. That is my place. The show starts in 15 minutes. Everyone is eating and drinking. The local fast food brings some bags and calls the names of people who ordered the food. The show starts. Men in make-up, kimono and geta make dramatic poses and dance on Japanese schlagers. Everybody cheers when a new player enters. Then there is a traditional burlesque. I don't understand one word, but the point is clear: adulterous wife got caught, sword fight, she cries her eyes out, final judgement. Then pause, thank God! My legs hurt badly from sitting on the ground. Part 3. The men of part 1 are now dressed as a geisha. On sugar sweet music they parade on stage. Fans run forward and pin money on their kimono. In return, they get an extra sweet smile. The people shout and applaud enthusiastic. How handy people afterwards put their shoes on without using their hands is an extra spectacle for me.



In Kumamoto I stay with Se-san and her parents, a family of rice planters. Their new house is in a bare area, excavators, roads under construction. There are some other new houses, but also sheds packed with furniture and stuff. ‘The earthquake of 2016 changed our lives completely’, says Se. The house and sheds of her parents collapsed completely. Her parents were rescued only next morning and had to revalidate for months and months. Now Se lives with her parents to take care of them.

We enjoy eating and talking together. I ask her questions about the Japanese work culture. Se explains: ‘Japan is mountains for 80%. So we have little space for agriculture and have to import our food. How do we pay for it? By becoming experts in something that brings us money: technology. Working very, very hard is a quality that is in our genes. We think it is a virtue’. To be able to ask questions like this at Servas hosts, helps me to understand a bit more of the Japanese culture.

Sh-san, my host in Miyazaki, welcomes me with spaghetti and a home brewed beer. How Japanese! Together we visit Aoshima, a beautiful island with a shrine close to Miyazaki, where his daughter married a Dutch man last May. We walk the island and talk about life in Japan and in the Netherlands. Sh's wife Se-san is a volunteer for elderly people. I am invited to her 'salon'. We start with yoga. Then Japanese songs. I contribute with a Dutch sleeping song I always sing for my grandchildren. At the end there is tea and bento-lunch.

Sh and Se take me for a ride through their part of Miyazaki. We go to Aya and walk over a high suspension bridge. We visit the atelier of an exquisite glassmaker and then it is time for sake-tasting! In the car we talk about differences in our cultures, especially about personal hygiene. We don't have wash toilets (I would we had!), but happily our toilet paper is thick. We don't do laundry every day, but only when the machine is full. Dutch people try to be rather economical with water. Our government encourages us to shower not longer than 5 minutes a day. This fact causes laughter and disbelief every time I tell this to Japanese people.



I traveled 3 months – from September 2nd till November 30st – through Japan from north to south and finally to Tokyo. In this period I stayed with 10 Servas hosts. Via Home Exchange I had a small house in Kyoto for 8 days and an apartment in Tokyo for the final 10 days. In between I stayed in hostels and ryokan.

This review was about my days with Servas hosts. I am very thankful for the great hospitality I found with all of them. With my hosts I experienced the everyday Japanese life. I could ask questions about everything I noticed, but didn't understand, I heard beautiful stories. I am spoiled with tasty meals and soft beds. The 'Servas-days' were absolutely the most interesting days of my trip. But also rather exhausting. To sense home rules, to adjust to daily customs, socializing – it takes a lot of energy. Alternating staying with hosts and staying in a hotel appeared to be the ideal rhythm. Tanoshikatta desu!

On November 30th I returned to The Netherlands with a head full of stories and a heart full of memories. I learned a lot about Japan. And I learned a lot from Japan. But the amount of questions I have, is not diminishing. My conclusion: the more you see, the less you know.

4. 編集後記にかえて

4月16日、安倍首相はついにコロナの緊急事態宣言を全国に発令しました。我が家の近くの病院にもコロナに感染したお医者さんが1人出ました。私は外出を控えるため、食料の調達はコープの宅配だけに絞ることにしました。SIニュースもSIサーバスユースの便りにもコロナに関する事が配信されています。世界の皆と手を取り合って、少しでも早くコロナが収束するように、細心の注意を払おうと決意を新たにしました次第です。

会長 H.T